

おほ 太田入道殿御返事

建治元年（一二七五）十一月三日。五十四歳。於身延。
 大田乗明宛。十一紙断。京都本園寺他五ヶ所現存。（定一二五頁 原漢文）

貴札之を開きて拜見す。御痛みの事、一たびは歎き二たびは悦びぬ。維摩詰經に云く、「爾の時に長者維摩詰自ら念ずらく、寢て床に疾む。爾の時に仏文殊師利に告げたまわく、汝維摩詰に行詣して疾を問え」と云云。大涅槃經に云く、「爾の時に如来、乃至、身に疾有るを現じ、右脇にして臥したまう。彼の病人の如くす」と云云。法華經に云く、「少病少惱」と云云。止観の第八に云く、「若し毘耶に偃臥し、疾に託て教を興す。乃至、如来滅に寄せて常を談じ、疾に因て力を説く」と云云。又云く、「病の起る因縁を明かすに六有り。一には四大順ならざる故に病む。二には飲食節ならざる故に病む。三には坐禅調わざる故に病む。四には鬼便りを得る。五には魔の所為。六には業の起るが故に病む」と云云。大涅槃經に、「世に三人の其の病治し難き有り。一には大乘を誘す。二には五逆罪。三には一闍提。是の如き三病は世の中の極重なり」と云云。又云く、「今世に悪業成就し、乃至、必ず地獄なるべし。乃至、三宝を供養するが故に、地獄に墮ちずして現世に報を受く。所謂頭と目と背との痛」等云云。止観に云く、「若し重罪有りて、乃至、人中に軽く償うと。此は是れ、業の謝せんと欲する故に病むなり」と。竜樹菩薩の大論に云く、「問うて云く、若し爾れば華嚴經乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず。法華は秘密なり等。乃至、譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」と云云。天台此の論を承けて云く、「譬えば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く、乃至、今經の得記は即ち是れ毒を変じて薬と為すなり。故に論に云

く、余経は秘密に非ず、法華を秘密と為すなり」と云云。止観に云く、「法華能く治す、復称して妙と為す」と云云。妙楽云く、「治し難きを能く治す、所以に妙と称す」と云云。大経に云く、「爾の時に王舎大城の阿闍世王、其の性弊惡にして、乃至、父を害し已りて心に悔熱を生ず。乃至、心悔熱するが故に偏体瘡を生ず。其瘡臭穢にして附近すべからず。爾の時に其の母韋提希と字く。種種の薬を以て而も為に之を傳く。其の瘡遂に増して降損有ること無し。王、即ち母に白す、是の如き瘡は心より生ず、四大より起るに非ず。若し衆生の能く治する者有りと云わば是の處有ること無けん」と云云。「爾の時に世尊大悲導師、阿闍世王の為に月愛三昧に入りたまう。三昧に入り已りて大光明を放つ。其の光清涼にして往きて王の身を照すに身の瘡即ち愈えぬ」と。平等大慧妙法蓮華經の第七に云く、「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに、是の経を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」と云云。

已上、上の諸文を引きて惟に御病を勘うるに六病を出でず。其の中の五病は且く之を置く。第六の業病最も治し難し。将又業病に軽有り重有り、多少定まらず。就中、法華誹謗の業病最も第一なり。神農・黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き、持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず。但し积尊一仏の妙経の良薬に限りて之を治す。法華経に云く、上の如し。大涅槃経に法華経を指して云く、「若し是の正法を毀謗するもの有れば、能く自ら改悔して還りて正法に帰せよ、乃至、此の正法を除きて更に救護すること無し。是の故に应当に還りて正法に帰すべし」と云云。荊谿大師云く、「大経自ら法華を指して極と為す」と云云。又